

## 1890年代における国文学カノンの形成

—明治期における「文学」の形成過程をめぐる国民国家論(5)—

The Canonization of Japanese National Literature in 1890's  
—A Study of “National Literature” in Japan as a “Nation State”(5)—

大本達也\*

Tatusuya OMOTO

### Abstract

In this paper we will examine the process of the canonization of Japanese National Literature in the 1890's. *The history of Japanese Literature*, written by MIKAMI Sanji and KOUZU Kuwasaburo (1890), was the first book that surveyed the history of Japanese national literature. HAGA Yaichi, who was called the father of Japanese National Literature, wrote *Ten Lectures of National Literature in Japan* in 1899. We assess the change of canons between 1880-89 through the comparison of these two books.

キーワード：カノン、国文学史、日本文学史、芳賀矢一、国文学十講

### 序論—1892年における2つの文学史

本論は、「各論 3-1」にあたる拙論「1890年における国文学の誕生——明治期における『文学』概念の形成過程をめぐる国民国家論(4)」(『CANPANA』13号 2006)の続編であり、「各論 3-2」にあたる。引用は《 》、出典は〔 〕、大本による注釈は( )で括った。なお、引用は、一部旧漢字を常用漢字に改めた。

各論 3-1では、(東京)帝国大学において、国民国家・日本における初の国(日本)文学史である『日本文学史』(1890)が、三上参二・高津鋏三郎(以下、「三上ら」)によって編まれるまでの過程を追い、その内容を検討した。この各論 3-2では、《国文学》の父とたわれる芳賀矢一の『日本文学史十講』(1899)を中心に、1890年代における国文学カノン

---

\*本学非常勤講師、近現代日本文学・思想 (Japanese Literature in 19-20th Centuries)

の形成過程を追ってみる。

三上らの著作の発刊以降、相次いで国文学史が出版される。ハルオ=シラネによると《明治後半期には、「日本文学史」ないし「国文学史」と題された書物が50点以上刊行され》ている[シラネ:82]。この時期には、「学問全般」を意味する「文学(理文学)」概念も根強い。例えば、古典講習課卒業の小中村(池辺)義象と増田干信による『中等学校・日本文学史』(1892)は、芳賀も指摘しているように《我国の芸文の歴史、学問全体の意味になつて》いる[芳賀:4]。この本の第1章「総論」には《文学ヲ類別シテ、沿革史ヲ作ル》とあり[小中村:9]、第2章は《学校》で、《大学》《国学》《私学》《幕学》《藩学》と分けられる。第3章は《學術》で、《漢学》《和学》《洋学》《音楽》《医学》《曆学》《算学》《書学》《画学》となっている。以下、第4章は《文字》、第5章《文章》と続き、第6章は《歌》として和歌を、第7章は《詩》として漢詩を取り上げている。第8章《歴史》は記紀などの歴史書、第9章は《小説》となっている。《小説》の定義は「フィクション」とほぼ同義で、能、浄瑠璃などのドラマを含み、漢文著作も排除しない[同:212-6]。けれども、これ以降、このような学問史としての文学史は姿を消してゆく。

同じ1892年には、大和田建樹による『和文学史』も刊行される。「鉄道唱歌」の作詞者として知られる大和田は、古典講習科や高等師範学校において教鞭をとったが、1891年より文筆活動に専念しこの本を完成する。三上らと同じく大和田は教科書としてこの本を編集したとしている[大和田:凡例1]。さらに、コリアの英文学史を見て、自らの文学史を企画したと回想しており[同:自序1]、西洋の文学史から日本文学史を構想した点も、テーヌの英文学史の影響を受けた三上らと同様である。さらに、《小にすれば1村1郷の方言なれども、大にすれば我同胞4千万人の発音を同じうし、意味を同じうし、興味を共にし、先祖を1つにせし我国語ならずや》[同:4]と言う大和田も、国語による著作を和文学としており、この理念も共通するが、漢文排除は三上らより際立っている。例えば、日本書紀について、漢文という《虚飾の文字に欺かれて事実を誤る例は書中に少なからず》と指摘し、《其上日本人は日本語を用ひ日本史を読みてこそ愛国心を發揮すべきに、外国語を借りて我国の歴史を書きたる、何れの国に求めてか其例を見ん》と批判している[同:93]。

さらに、国文学史の目的たる愛国心養成について、三上らは《文学史は、国民をして、自国を愛慕する観念を深からしむる》とやや控えめに述べていたが[三上(上):6]、大和田の場合、《ああ我同胞4千万の諸君よ》と大仰に呼びかかる[大和田:11]。そして、日本国民は《君を共にし、国を共にし、風俗を共にし、言語を共にし、歴史を共にし、文明史を共にする》のであり、《文明史と歴史とを共にし言語風俗を共にする関係は、同胞4千万の1大強国》を建てたが、我々にとって《文学史は愛国心を養成する原素の主たる部分を占める、と締めくくるのである[同]。執筆構想は1880年だったと言うから[同:自序1]、もう

少し早ければ、初の文学史は大和田の手になっていたかもしれない。

## 1. 奈良期まで

『国文学史十講』は、帝国大学国文科教授であった芳賀が帝国教育会において行った夏期講座をまとめたものである。芳賀は、《緒言》に1章、《上古》、《中古》、《近古》、《近世》それぞれの文学に2章ずつ、最後に《現代文学》の章を置き、この本を10章構成にしている。各章の本文の上には小見出しが掲げられている。以下、そこに挙げられている書名や著者の作品を、この時点において芳賀が選定した国文学カノンにとらえ、大和田の意見を管見しつつ、三上らの評価と対照し、それらを検証していきたい。

各論3-1で見たように、小説、詩歌といった《美文学》と同時に、歴史、哲学、政治学と言った《理文学》が発達なければ《文学の正しき進歩》とは言えない、というのが三上らの基本的立場であった[三上(上):緒言3]。これに対し、芳賀は、まず、文学とは《学問全体と云ふ意味でもなく、文章を作る為めの学問でもなく》、《書かれたもの、即ち製作物》を指すのであり、《画師が画を書いて、其画が一の美術品であるが如く》、《文人によつて作られた製作物》を言うであり、《歌であるとか、文であるとか、作られた美術品を指》すのであるとし[芳賀:4-5]、「美術」=「芸術」としての「文学」という概念を明確に打ち出す。

また、日本語著作のみを採るという基本理念について、三上らは《漢文は凡て之を採らず。但し其国文学と関係せるところは、固より之を明かにせり》と謙虚に述べるだけだったが[三上(上):緒言11-2]、芳賀の場合は、まず日本語は《千古不易なる国語》であると高らかに宣言する[芳賀:7]。さらに、日本は《太古から建国数千年の久しき、少しも外国の侵略を受けたことがなく》、《万世一系の天子様を戴いて》おり、人々は《数千年来、代々相續いて、日本語を話して来》たとし、《其日本語で綴つた文学が今日吾々の手に残つて居るといふことは如何にも貴い幸福なこと》であると述べる[同]。そして、《吾々の先祖がその思想感情を国語の上に表はして置いたもの》は《立派に美術品に出来て居る》のであり、《それを国文学と名ける》と宣言する[同:4-5]。このように芳賀は、国文学史とは国語を用いた《美文の歴史》であると明確に定義づけるのである。

芳賀は《国民教育の根本は国語であり》、《その国語教育といふ事を考へるには文学史上の智識が無く》てはできない、と言う[同:267]。また、《文学には外形と内容があり》、《外形は即ち国語であり》、まず《其国語の綴り方が立派に出来て居らなければ》ならないが、その内容たる《思想も高尚で立派でなければならぬ》としている[同:12-3]。そして、《国民の思想、道徳、感情と云ふものが、其国文学の上に反映されて居る》のであり[同:6]、《それを調べてみることは、即ち我が国民の思想、感情の変遷を見る》ことであり、《国民の心性生活を知る》ことである、と国文学研究の意義を説く[同]。

それでは、以下、時代別にカノンを追っていこう。

芳賀は奈良時代までをまとめて《上古文学》とするが、この項で挙げられているのは、記紀の歌、祝詞、人麻呂の歌、山部赤人、万葉集、古事記、風土記、宣命である。

この時代に対する三上らの結論は《歌に富みて散文に貧し》く、《古事記、風土記、宣命等の文章の如き、一種の特色を具ふる》散文が登場したものの、和歌には比べようもないというものである[三上(上):107]。大和田もこの時期を《歌の世界なり》と結論づけている[大和田:139]。同様に芳賀も、《国文学の散文は未だ発達しない時代》であるとしている[芳賀:71]。それでも芳賀は、古事記の地の文と宣命を散文文学と位置づけている[同:65]。宣命については、《万葉集時代の勅語が残つて居るのは、文学上から尊むべきこと》であるとし、祝詞は《神様に申上げる》言葉であり、宣命は《生きた神様から頂戴する言葉で、荘厳な点に於て荘重な点に於ては一致して居る》としている[同:68]。また、三上らが《祝詞は、実に我国散文の始めともいふべきもの》としているのに対し[三上(上):82]、芳賀は祝詞を韻文(歌)に分類している[芳賀:39]。

芳賀は、日本書紀の地の文については《漢文で歴史を書くに云ふ所まで、此時代は進んで来ました》と述べるだけで国文学として扱っていないが[同:68]、《日本紀、古事記の歌を以て、上代の歌として宜い》としている[同:28-38]。古事記は《人の口々に伝誦した事を直に筆記した》もので、これにより《初めて日本の歴史と云ふもの》ができたのであり、その歌は《我国の神代紀を歌つた詩とも見られ》、《太古の文学とも見られ》ると述べる[同:65-6]。けれども、その神話についての説明はほとんどない。ところで、《万葉集は、実に我国の詩経なり》[三上(上):137]とする三上ら同様、芳賀も《万葉集は我国歌の淵源》であるとし[芳賀:61]、その評価はすこぶる高い。神野志隆光の指摘するように、芳賀の文学史においては、記紀を《民族の古伝》とする位置付けはなく、《『万葉集』に先行する歌を載せることへの関心が中心》なのである[シラネ:206]。

三上らは風土記について、《国文学上の価値は、殆ど之なし》としている[三上(上):135]。芳賀も、出雲風土記は全部残っているものの、他の風土記は断片的にしか残っておらず、内容的には、日本思想でない話が多いとして、漢仏思想の影響の古さを述べているだけである[芳賀:67]。

以上のように、この時期の文学については歌の評価が高く、散文の評価は低い。そのため、カノンとしての万葉集の地位が確立しているのに対し、書物全体としての古事記のカノン評価は始まったばかりである。

## 2. 平安期

平安期の文学は「中古文学」とされる。そこに小見出しとしてある作品群は、神楽歌、催馬楽歌、六歌仙、伊勢物語、竹取物語、古今集、土佐日記、後撰集、拾遺集、大和物語、住吉物語、落窪物語、とりかえばや物語、うつほ物語、源氏物語、紫式部日記、枕草子、

栄華物語、大鏡、今昔物語、後拾遺集、今様、朗詠である。

平安期についての三上らの評価は、《日本男子の勇壮なる気風》は消耗し、《姿も心も女々しく》なってしまう[三上(上):202]、人心は《艶麗優美なるを花の如く、又、月の如し》であるが、《柔弱にして気力なく、淫逸にして節操を欠》いた時代である、というものである[同:209-10]。大和田もこの時代について《国語を用ひて歌をよみ文をつくる事》が《専ら婦女子の業とて賤しまれ、漢文を称して、男文字、仮名文を称して女文字と呼ばれるるに至》っては《あさましき世の中なりけり》と慨嘆している[大和田:145]。

一方、芳賀は、《王朝の最も盛な時は、我国に於て文学の盛に起つた時代であ》るとし、《文学の盛衰は藤原氏の消長と親密な関係を持つて》おり、道長の時代が《我が文学の最も盛な時代、中古文学の最も盛な時代》である、としている[芳賀:72-3]。ただ、この時代は《散文の世》だが、《新しい国文》たる仮名を《自在に書綴つた人は大抵女子》であり、その文学の特徴は《真に女らしい》ことであるとする[同:74]。

三上らは《国文学の上より観察して、大に価値あるものは、大抵新に此時代にあらはれた》のであるが、和歌は段々に変化し、ついに《万葉時代のものと比較すべき価値なきものと》なってしまったとしている[三上(上):200]。ところが大和田の場合、平安期は《後世古文を学び和歌を習ふものの規範を遺》した時代で、《日本歴史中の一大光彩を与へ》ていと評価する[大和田:315]。また三上らは貫之をさほど重要視しないが、芳賀は貫之を《歌も文も上手で文学史上大切な人》であるとし、古今集、後撰集、拾遺集の和歌三代集を詳解している[同:88-93]。

芳賀は、竹取物語を詳述し[同:84-7]、伊勢物語に詳解は付さない[同:82-4]。そして、《源氏物語が出て来るまでには、小さな物語が、どの位出たか知れ》ないが[同:102]、《さう云うやうな様々な物語に書いてあることは大同小異、大方は男女の情話を材料として居り》、それは《腐敗した上流社会の反映にほかならぬ》と他の物語を切り捨てている[同:104]。三上らも、この時代では物語ははなはだ多いが、源氏物語こそが《平安朝文学の精粹にして、雅文の極美なるもの》であり、《絶世の傑作、千古の妙文と称へらるる》とする[三上(上):232-3]。

芳賀も源氏物語を《物語の親玉》と呼び、別格扱いする[芳賀:87]。物語のみならず紫式部とその日記への解説も多い[芳賀:105-19]。それでも、手放して称賛するわけではない。源氏物語は、馬琴のように《儒教主義を以て、勸善懲悪で押して往く》ものではなく、《人情を主とする為に書いたと云ふ意見が正しい》のであり、《社会の腐敗した有様を多少慷慨したか知らんが、唯時代の有様を有りの儘に写し出した写実小説と見るより外はない》のであり、《写実的に其社会の有様を写出した小説に過ぎない》とするのである[同:109]。さらに、男女関係の乱れた《腐敗した社会の有様を書いたものを、我国文学の第一のものやうに珍重しなければならぬ》というのも、実は情けないもの》であり、とりわけ《学校

などで教科書などにして読ませるといふことは決して面白からぬこと》であると芳賀は慨嘆する [同:116]。けれども、《歴史をやる人も、語学をやる人にも、大切な好古の材料になるので研究する必要》があり、その筆力、全体の文章の力、文学上の技量、後の文学への影響、とりわけ《仮名文でそれ丈の影響を後に残したと云ふことは、文学上から見れば誠に貴いこと》で、《国文学歴史の中では、とに角大立物》であると結論づけている [同:116-7]。

三上らは栄華物語や大鏡について、《文章といひ、体裁といひ、小説に類似したる雑史あるのみ》としているが [三上(上):338]、芳賀も両者に簡単に触れるだけであり [芳賀:122-4]、総じてその評価は高くない。枕草子について、三上らは《意志深邃にして、議論の巧妙なる、筆峰の自在にして、記事の趣味ある、古来実に枕草紙に及ぶものなし》 [三上(上):322-3] と最大限の賛辞を贈っているが、芳賀も《紫式部の源氏物語と相並んで我国の国文に双絶と唱へられるのは、清少納言であ》るとしており、その評価はすこぶる高い [芳賀:119-20]。

貫之の歌を評価する芳賀は、土佐日記も重要視する [同:96-8]。三上らは土佐日記、紫式部日記の2つの日記を別格としつつ、蜻蛉日記、和泉式部日記、更科日記にも言及するが [三上(上):299-317]、芳賀はこれらの日記を《文章にも、趣向にもそれ程の大叙述》もなく、《大抵は千篇一律》とほとんど評価しない [芳賀:121-2]。《現在「日記文学」と呼ばれる作品のうち、『土佐日記』と『紫式部日記』は早くから、少なくとも12-13世紀の藤原定家の時以来高い価値を与えられていた》と鈴木登美は言う [シラネ:87]。そして、《「日記文学」という概念が登場》し、その価値が高く認められるのは大正末、《1920年代半ば》のことなのであり、《ほとんど20世紀に入ってから》ようやく「日記文学」は日本の古典において《中心的な地位を授け》られると指摘している [同:85]。

以上のように、土佐日記、紫式部日記がカノンとして安定しているが、他の日記の評価は低い。フィクションでは竹取、伊勢が大切なカノンであり、源氏は最も重要かつ問題を含むカノンとされている。他のフィクションの評価は総じて高くなく、歌の評価は上がりつつある。

### 3. 鎌倉・室町期

鎌倉・室町時代は「近古文学」としてまとめられ、そこに挙げられている項目は、軍記物語、平家琵琶、方丈記、徒然草、西行法師撰集抄、十六夜日記、水鏡、増鏡、神皇正統記、十訓抄、古今著聞集、新古今集、新古今集以後の勅撰集、謡曲、狂言、御伽草紙、連歌である。

三上らは鎌倉期について《外貌は衰へたる如し》であるが、実際は《新奇なる現象を呈し、活発なる元気を蓄え》た時代で、《江戸時代の文学の萌芽》はこの時代にあるとし [三上(下):5]、南北朝・室町期については、《惨憺たる暗黒の中に、処々に学問の輝くる》時代としている [同:99]。大和田もこの時期を《文学史中の暗黒時代》と呼んでいる [大和

田:406]。芳賀は、鎌倉、室町は近古文学の《概して衰頹した時》であるが、《一旦花が散つて冬枯れになつても其翌年花の咲くまでには、絶えず用意をして居る》のと同じで、《徳川時代の文学は鎌倉足利の変遷を経て出来上がった》のであるとし[芳賀:131]、三上らと同じくこの時代を徳川期への準備期間ととらえる。

一方で三上らは、仏教の広まりとともに漢語・仏語が《大和詞と相調和》し、《国語の範囲、国文の区域、大に弘まりて、事物を書きしるすに、至大なる自由を得たり》と、この時代の書き言葉の変化を肯定的に評価している[三上(下):10]。《漢語と仏語を混ぜた和漢混淆文が段々と出て来》て、《遂に今日の普通文となる基礎を作》った時代だという芳賀の評価も同様である[芳賀:133]。シラネの言うように、芳賀らは《中世以来用いられた「和漢混淆文」を、平安期の平仮名文より精力的かつ男らしいとして評価している》のだが[シラネ:29]、その背景には和漢混淆文を明治期における書き言葉の模範と見ていることがある。その元となった文体を生み出した時期としてこの時代を評価するのである。この視点から、三上らは、水鏡は《殆ど純粋なる平安朝の文》であるが、平家物語、源平盛衰記は《和漢混和文の上乗にして、江戸時代の漢学者の手に成りしものと匹敵す》るものであり、太平記もこれと並ぶとするのである[三上(下):27-8]。また、南北朝・室町期の散文では、《歴史体の文学》である神皇正統記、増鏡、太平記は《散文の模範として見るべきもの》であり、随筆の徒然草を含め《文学上の著作中、第一流の地位にあるべき》4書だとしている[同:106]。一方、芳賀は水鏡、増鏡、神皇正統記について簡単に解説するだけで[芳賀:145-8]、太平記に至っては名を挙げるだけである[同:135]。

芳賀は、軍記物について、《文人が小説的に書いた所があり》、歴史研究が精密になっている現在、史料として取ることに躊躇するが、《文学としての価値は一層加は》るとし[同:136]、保元物語、平家物語、源平盛衰記を評価する[同:133-40]。これは、三上らの軍記物は《歴史としてよりは、寧ろ文学上より之を観察するときは、其価値はその至大なるを知る》という評価と同じである[三上(下):27]。この転換についてデイヴィッド=バイアロックは、芳賀らは軍記物の《歴史としての特権的な地位を》奪った代わりに、《「国文学」上の重要な作品として》《再生する足掛かりを築いた》と指摘している[シラネ:152]。このように、軍記物はこの時期において、歴史資料から文学作品へと再生させられる。

さらに芳賀は、《平家琵琶》という小見出しを設け、能もこの琵琶法師の物語から発展したものであり、芝居の材料の多くは《源平時代にとつて居る》ため、《軍記物語が後の文学に大影響を与えた事は実に莫大》だと指摘する[芳賀:137-9]。軍記物を《芝居》＝「ドラマ」の源流に位置づける視点は三上らには見られない。そのため、芳賀においては、謡曲、狂言への言及も多い[芳賀:164-79]。三上らが謡曲も《明らかに戯曲の性質を備ふる》としながらも[三上(下):431]、《伝奇小説の類》と位置づけ、《我国の文学史上に、奇異なる光を放つもの》としたのに対し[同:153-4]、芳賀は、謡曲、狂言を《浄瑠璃を發達させる根

源になったもの》として積極的に評価すると同時に、御伽草子を小説などと《大事な関係がある》ものとしている[芳賀:186]。このように、芳賀は、三上らに比べ、文学ジャンルとしての小説、ドラマを強く意識している。

三上らは、《議論の深遠高尚なるを、我国文学の中には、此書に比すべきものあらざるべし》と徒然草を絶賛し[同:109]、方丈記も《其文筆自由自在にして、枕草子に並ぎ、また殆ど徒然草と肩を駢ぶるに足る》とする[同:15]。芳賀も、この時期の思想を最もよく代表しているのは隠遁文学だとして、方丈記と徒然草を紹介し、《いづれも我国の文学では立派な地位を保つもの》であるとしている[芳賀:140]。さらに、三上らは、この時期の日記・紀行文をいくつか挙げているが[三上(下):31-58]、芳賀は西行の作品と十六夜日記を紹介するのみである[芳賀:142-5]。

新古今について三上らは、技術の点では《極妙の域に達し》ているが、《氣力を失ひ、織巧に陥り、軽浮に流れ易》いと否定的な側面も指摘している[三上(下):61]。これに対し、芳賀の場合は、《形体に於て変転を尽くした》のが長所であると、その技巧的な面を肯定的にとらえている[芳賀:149-58]。三上らは鎌倉末期より《和歌は急速に退歩の運に向》ったと指摘し[三上(下):68]、連歌にも軽く触れるだけであるが[同:172-3]、芳賀は古今以後の勅撰集だけでなく[芳賀:158-61]、連歌も詳しく解説している[同:180-5]。

以上、この時期では、徒然草、方丈記が安定したカノンである。歴史関係では、神皇正統記などの評価が下がりつつあるが、軍記物は歴史から切り離され、文学カノンへと転換される。和歌の評価は上がりつつあり、能の評価は端緒についたばかりである。こうした力点の変化は、ドラマを含めたフィクション全体がカノンの中核に登りつつあることを示している。

#### 4. 徳川期

芳賀は「近世文学」として、徳川期の文学を解説している。小見出しは多く、藤原惺窩、中江藤樹、木下順庵、伊藤仁斎、荻生徂徠、細川幽斉、松永貞徳、北村季吟、新井白石、貝原益軒、戸田茂睡、下河辺長流、契沖、荷田春満、芭蕉、井原西鶴、近松門左衛門、竹田出雲、近松半二、紀海音、西沢一風、江島其碩、賀茂真淵、橘千蔭、村田春海、縣居門人、本居宣長、鈴屋門人、伴信友、平田篤胤、高田興清、橘守部、小沢蘆庵、富士谷成章、香川景樹、千草有功、四方赤良、宿屋飯守、平沢平格、谷口蕪村、横井有也、柄井川柳、上田秋成、山東京伝、滝沢馬琴、式亭三馬、為永春水、柳亭種彦となっている。

ここにある項目の多くが漢学者や国学者である。三上らは、この時期の文学を、第一に《漢学者の和漢混和文》、第二に《和学者の雅文、および和歌》、第三に《俳諧、俳句、俳文、狂歌、狂文の類》、第四に《戯曲、及び小説》と分類し[三上(下):194]、漢学者の散文を徳川期カノンの筆頭に、フィクションを最後に置いている。シラネの指摘するように、



三上らは《江戸期の作品のうち、劇やフィクション》、とりわけ淫蕩に思われた末期の戯作よりも、《学者・文人の手になる随筆のほうを好んだ》のである[シラネ:428]。

漢学者の散文は、当時の書き言葉の手本でもあった。三上らは《漢学者の手より生れ出でし、この和漢混和文こそ》《国文の標本》とするべきだと唱える[三上(下):212]。とりわけ、白石や室鳩巢の文を《其技巧殆ど神に入る》と絶賛する[同:214]。《およそ上下三千年、これ程学問の盛んな時代はありませぬ》と言う芳賀も同様で[芳賀:188]、《この時代の漢学者が作った和漢混淆文が即今日の普通文の基礎》となったと、漢学者の和漢混淆文を尊ぶ[同:198]。このように、教科書として編纂されている国文学史には、学問としての「文学」、文章術としての「文学」の概念が根強く反映され続けている。

三上らは《俳文、狂文等、遊戯三昧のもの、および戯曲、小説等の、人の嗜好を楽しみむるもの、大に行はれて、世の中に、重大なる勢力を有し、文学界の主要なる地位を占むるに至りき》として、学者以外による作品に言及する[三上(下):187]。そして、俳諧・俳句において、山崎宗鑑、荒木田守武、松永貞徳、安原貞室、西山宗因らとともに芭蕉を俳門六哲の一人に挙げ、俳諧《中興の祖》とする[同:402-3]。一方、芳賀の場合、芭蕉の《成し遂げた仕事は立派な仕事といわねば》ならないものであり、俳諧において《一台革命を起》こしたとしており[同:203-5]、芭蕉作品のカノン化を進めている。

フィクションについて三上らは、まず《江戸時代の戯曲小説には、淫靡猥陋の文、甚だ多く》、《或る作者に如きに至りては、其妙処は、常に引例として、此書に掲載する能わざるばかりに、猥褻なる文章のみに存し、余輩が此書に引くを憚らざるほど》であると前置きする。[三上(下):430-1]。その上で、近松については《実に非凡の力を浄瑠璃に尽し、其真光を發揮せし人》であり、《誰しも其不世出の文豪なる事を疑はざるべし》と評価し[同:437-9]、他の浄瑠璃作者と一線を画している。これに対し芳賀は、まず近松について、《卑劣穢雑の点は免かれ》ないとしながらも、その《貴いところ》は《歴史上に何の名もなき匹夫匹婦をつかまへて、其運命によりて人間社会の状態を写し出すこと》に《或る点まで成就し》たことであるとする[同:218-9]。そして、《人情の底から見る詩人の目には、哀れな心の悲痛が映》ったのであり、当時の人はそういった《話を楽しんで涙を流しながら聞いた》のであるが、自分は《今でも涙ながらそれを見聞く》と告白している[同:220-1]。

三上らは《江戸時代の小説は、実に此時代の文学の、大部分を占領せるもの》だとし、それらを《端物恋情小説》、《歴史小説・伝奇小説》、《滑稽小説》の3種に分類している[三上(下):458-9]。第1の《端物恋情小説》では、まず西鶴を挙げ、《深遠なる学識あるにあらず》、《高雅なる理想を有するにもあらず》、《其作何れも猥雑卑陋》であり、《此才子にして、此才筆あ》るが、花柳界など《俗陋なるもののみに》それを注いだことは惜しいことであるとし、その評価は低い[同:461-2]。これに対して、芳賀は西鶴を《書いてあることは如何にも猥褻であるが》、《その筆力は立派な文学者》であり、《後の文学に与えた影響》

も大きいと評価する[芳賀:214-5]。西鶴は《写實的に腐敗した社会を映し出した》とし[同:214]、その文体は《尾崎紅葉などが大層に珍重》したとする[同:212]。

三上らは《文筆に従事する者が、之を匡正するを念とせず、只人情風俗を壊乱する文章を作りしは、何事ぞや》と為永春水を激しく罵倒している[三上(下):467-8]。これに対し、芳賀は春水作品を《西洋でいふ人情小説「ノヴェル」に似て居る所》があり、逍遙・坪内雄蔵が『小説神髓』で《馬琴などの勸懲小説を排斥して大層春水などを褒め》たとし、《一派を開いた人として記憶しなければ》ならない、としている[芳賀:249]。

三上らは第2に《歴史小説・伝奇小説》として数多くの作家を挙げているが、最も紙面を割いているのは馬琴である。三上らは馬琴をシェイクスピアに比し、《小説界中、古今独歩の巨擘と称せらるる》と絶賛している[三上(下):498]。芳賀も三上ら同様、近松と並び馬琴を《徳川文学の花》と称賛する[芳賀:244]。それは、《これ迄は小説を書く人には、学問のある人は少なかつたが、馬琴は老儒の学から和書に至るまで悉く目を通して歴史にも地理にも明る》く、《其学才を以て筆を取》ったため、《規模の大きなこと、文章の力のあること、外の人とは比べものにな》ならないからだとする[同]。馬琴の読本は、《ありふれた情話にも必ず歴史上の事をあてはめて、主君や親や夫の為に忠義を尽し苦節を守る様に作りかへた》ものであり、《全く勸懲主義のものとなつて、教訓的のもの》である[同:246]。けれどもそれは欠点ではない。なぜなら、《小説といへば士君子の家庭には這入らぬものとなつて居つたものが、これからは如何なる社会の人にも読まれる様にな》ったからであり、《馬琴に至つて貴族的文学と平民文学とか幾分が調和しかかつて来た》からである[同]。このように、芳賀にとって馬琴の諸作品は、《其国語の綴り方が立派》で、《思想も高尚で立派》な理想の文学作品であった。

第3に、三上らは《罪のなき文章》である《滑稽小説》として、十返舎一九と式亭三馬を挙げる[三上(下):526]。その評価は高く、江戸期の小説家全体では、馬琴が文句なく首位であるが、三馬がこれに次ぎ、山東京伝、柳亭種彦、一九が続く、としている[同:531]。一方、芳賀は一九、三馬ともに簡単に触れるだけである[芳賀:247-8]

以上、この時期には漢文学者による和漢混淆文の著作が最高位カノンとされているが、徳川期には学問としての文学から遠い位置にあったフィクションの評価は急上昇している。歌では芭蕉の評価が上がりつつある。

## 結論—現代としての明治期

最終章は《現代文学》として、明治文学の解説にあてられている。項目としては、諭吉、新聞の発行、翻訳文学、坪内逍遙、演劇改良、紅葉、露伴、美妙、一葉、蘇峰、陸羯南、雪嶺、朝比奈碓道、樗牛、鷗外となっているが、三上らの本では明治文学への言及はないく、本論での考察は行わない。

以上、時代別に国文学カノンを追ってきたが、カノンの選定においては散文、とりわけフィクションの扱いが最大の課題であった。シラネの言うように、《近代以前における漢学・国学の分野は、歴史や哲学、宗教、言語、政治学の研究を含む広範な領域を覆うものだったが》、《「国文学」という新たな分野は、この文学カノンに根本的な変更を加えた》のであり、《文学を学ぶにあたって欠かせないジャンルを切り捨てるとともに、漢学・国学双方においてきわめて低い地位しかもたなかったフィクションの地位を引き上げた》のである[シラネ:24-5]。

最後の章で芳賀は、大学出身者である逍遙の登場について、《これ迄は小説家といへば概して品位の劣つたものであつたが》、ようやく《立派な紳士、学士たる人が筆を取られた》としている[芳賀:257-8]。また、馬琴作品の勸善懲悪主義を賞賛していたにもかかわらず、逍遙が《小説神髓には文学の種類を評論せられ、馬琴などの勸懲主義を排斥》したと解説している[同:258]。ちなみに、三上らは《勸善懲悪の主義が、果して小説に適當のものなりや否やは、暫く置》くとする[三上(下):502]。このように、逍遙の存在は、別路線を走っていた帝大における国文学研究とフィクション生産の現場を結びつける重要なバイパスのひとつとなっていたのである。

本の最後で、《雄大な国民としては必ず雄大な国文学を持たねばなりません》と芳賀は訴え[芳賀:265]、国民文学の登場を切望する。《歴代の文学は実に国民の文化の花で、国民の実》であり、《如何にも豊富》であるが、西洋文学に《及ばぬところも勿論沢山ある》のであり、《深遠高大な思想を歌つた詩篇や、国民を代表すべき立派な戯曲などは、まだ我々はおもつて》いないと芳賀は嘆くのである[同:264]。日本は《東洋の一古国》であり、《文学の光は西の方欧羅巴諸国のまだ真暗闇の時分から輝いて》いたと言う一方で[同:263]、《今後の国文学は欧羅巴文学の長所乃至は亜米利加文学でも阿弗利加でも世界の文学の長所を取つて一層雄大に且高尚にならせなければなりません》と訴える[同:265]。そして、《東西文明の調和》が《日本人の為すべき事業》であり《天職》であると言い、《立派な翻訳は立派な国文学》だと翻訳の推奨もする[同]。この時期の芳賀には、国文学に対する自負と劣等感が交錯している。

1890年代、日清戦争を経て、国文学は漢文学を切り捨てつつあったが、欧米文学に対する劣等感を軽減するには、次世紀の日露戦争を待たねばならない。

#### 引用文献

大和田建樹（1892）『和文学史』博文館

小中村義象・増田千信（1892）『中等教育・日本文学史』博文堂

シラネ、ハルオ・鈴木登美編（1999）『創造された古典——カノン形成・国民国家・日本文学』新曜社

芳賀矢一（1899、第5版1903）『国文学十講』富山房

三上参次・高津鍬三郎（1890）『日本文学史』（上）（下）金港堂